

## 死活の聴き方

申命記5：1

マルコ4：21～25

イエス・キリストというともし火は光り輝いています。古から、今、そしてこれからもずっと輝き続けてこの世と照らしています。この世を照らすともしびは誰がつけたのでありましょか。それは父なる神様です。父なる神様が暗いこの世に一条の光を送って下さいました。その光は私ども人間がどのようなものであるかにかかわらず、すなわち光を受けるにふさわしいとか、ふさわしくないとか、或いは必要とするとか必要としないとか人間の側の要求や状態に関わらずに与えられています。その光は福音という光でもあります。神さまは、イエス・キリストを通して良い知らせをこの世に送って下さいました。その福音の光によってこの世は明るくなり、闇の中を歩んでいたものも光のうちを歩めるようになりました。私どもは暗い中でともし火を掲げるときに、それを覆ったりはしません。光を覆ってしまえばその光はさえぎられて周りを照らすことはなくそれは機能しません。あるいはベットの下の方に隠すように置いておくこともしません。暗い部屋を明るくするには、ともし火を台の上においておきます。それがともしびが置かれるべきところです。置かれるのにふさわしい場所です。それぞれのものには置かれるのにふさわしい場所というのがあります。それを間違えてしまえば、そのもの自体の存在意義が失われてしまうことがあります。福音の光は照らすためにあります。それは覆われてはいけません。福音の光はみ言葉と言い換えてもよいでしょう。つまりみ言葉は光り輝いてこの世を照らすものであるから秘められたままではいけないのです。それは明るく照らす機能を果たさなければならぬのです。しかしイエス様のみ言葉はストレートに露にされているようなものではないかもしれません。イエス様はしばしばたとえを用いて語られました。私どもが、普通、たとえを用いて話すというと、何か分かりづらい難しい内容を身近なものを使って分かり易くするというようなことでしょうか。しかしイエス様のたとえ話はどうでしょうか。確かに身近なものを用いてお話しされます。種蒔きのたとえや、ブドウの木のとえ、また今日お読みしたようにともし火など身近に必ずある物で説明されています。しかしそのたとえを聞いた者ははっきりと分かり易くすぐに理解できたのでしょうか。前回ご一緒にお読みした種まきのたとえでもイエス様がたとえを話されてもすぐにピンときた人たちをいうのはどれほどいたのでしょうか。聖書というのは時代によって後から加筆された部分もあります。それはイエス様のたとえのように、その言葉がなかなか理解されずに、色々解釈されるようなところがあって、これではだめだ、教会はこのようにイエス様のたとえを聞いていかなければならぬ、イエス様はこのたとえでこのようなことを言われたかったのだと考えて、解説したものを付け加えることもしてきました。そう考えるとイエス様は、たとえでもって分かり易く単刀直入に説明されたというよりも、むしろたとえでもってそれをちょっと聞いただけではむしろ分かりにくくして、じっくり考えて自分で悟り知るようにさせたようなところがあります。言ってみれば「知る人ぞ知る」みたいな感じであり、誰にでもわかる安価な恵みではないのです。真剣に耳を傾けて、その言葉を心の中に納め、思いめぐらせて、イエス様の真意を知ろうという心がなければ理解することができないのでしょうか。「聞くには聞くが、理解はできない」人のなんと多いことでしょうか。福音の光は秘められたものであってもそれは必ず露になることを神さまは欲するのです。また露になるべきなのです。しかし神さまの恵みを軽んじる者はその福音の光を用いようとはせず、露にしません。というよりも露にすることができないのです。せっかく明るく輝いて周りを照らして見えるようにしてくれるともしびを正しく用いることができないのです。すでに与えられているともし火をふさわしい場所に置くこと、すなわち正しく用いることはイエス様の語られたみ言葉を正しく聴き取ることです。み言葉を正しく聴き取るということは、特別に知能が高いとは教養があるとかそのような素地が必要であるというわけではありません。イエス・キリストの父を真の神様として畏れ敬って、聖書に記されたみ言葉に聴き従うという、従順な心があればよいのです。確かに人は自分の関心や視点でもって物事を見聞きしたりします。その事物、事象に対して自分なりの見方や判断をします。聖書を読

み、イエス様のお言葉を聞かしても、聖書が自分に語りかけていることを自分なりにこのように読んだというところもあるかもしれません。それはそれでよいかもしれません。かつて文豪には、それぞれの人にはそれぞれの聖書の読み方があると言ったものもありました。しかしそれではイエス様が本当に言おうとしていたことを曲解してしまう恐れがあります。聖書が古より人々の生きる糧として、命の書として読み続けられてきましたが、過去にどのように読んできたかということの蓄積でもって聖書はこのように読まれるべきだという、またイエス様のお言葉はこのように解釈されるべきだという筋があります。つまり自分はこう聞いた、こう読んだというよりも、聖書が語りかけること、イエス様のいわれていることを、その真意の賜物を受け取ることに努める、また探し求めることをしたいものです。み言葉を聴いてその真意が分かるというのは一つの驚きであり、喜びでありそして奇跡なのです。「聞く耳のある者は聞きなさい」と主は言われますが、聞く耳のある者とは誰のことでしょうか。聖書というのは永遠のベストセラーですので、多くの人の手元にあることでしょうか。文學に関心のある人や思想や哲学に興味のある人、その他にも様々な学者が聖書を文献として研究もしています。そのような人たちが詳しく聖書を読んだとして、果たしてその内の何人が救いの道に導かれることでしょうか。またある程度教会に来て信仰生活をしていますと、聖書のみ言葉に馴染んでいきます。聖書の筋というのが分かったようになってきます。確かに聖書はどこをとっても福音が示されているので、言ってみれば始めから終わりまで伝え語られていることは同じともいえます。ですから聖書を読んだり説教を聞いてもなんだか自分はもうわかっているという気にもなります。しかしそうなるそれ以上に深くみ言葉に沈潜していくことができなくなってしまうのです。しかし自分自身にお基を置かずに、神様に基をおいているものは、週ごとにみ言葉を聴いて新しくされるという出来事が起こる、そのような奇跡が起こっていくのです。

私どもはこの世に生きていていろいろな情報が入ってきます。日毎に新しいニュースがあり、たくさんの本が出版され、多くの学説があります。情報に溢れているのが現代です。しかしその中で私どもの聴くべきことは何でしょうか。様々に入ってくる情報の中から、秘められた神様からの徴を見つけることをしていきたいものです。そうするためには先ずわたしどもはイエス様のおっしゃられたこと、そして聖書のみ言葉に耳を傾けて神さまからの秘儀を悟らなければなりません。

聖書のみ言葉に耳を傾けてその奥義を知ろうとするものには、救いの道が備えられています。自分が聖書から得た真実によって、私どもは神さまのみ心が何であるのかを知ることができるようになります。そうすればなぜ神さまが、今このような世界を造られたか、このような状態にあるのかに対しての信仰的な認識や受容ができるようになります。25 節には「持っている人はさらに与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる」とあり、この部分は締めくくられていますが、なんだかこれを聞くと格差社会の拡大した現代の資本主義の終焉を見ているような気にもなります。しかしここではみ言葉に対して聞く耳を持っているものに与えられる大きな恵みを言われているのです。聞く耳があるならば聞きなさい、いや聴かなければならないのです。なぜならそれは神様が欲しておられることであり、イエス様の御命令でもあるからです。命令に従うというのは、この世的には、何かに屈した感じがあり気持ちの良いものではない気がしますが、イエス様の命令に従うこと、神様の命令に従うことは、決して屈服ではなく返って恵みであり喜びなのです。私どもはむしろ喜んでイエス様の命令に従っていくのです。そのような者には恵みに恵みが増し加えられます。イエス様のお言葉に耳を傾けて真剣にその真意を捜し求める者には、思いもよらぬ新しい多くの恵みが増し加わるといふ奇跡が起こることでしょう。